これって、いわゆる……（仮）

渡りガラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
これって、いわゆる……（仮）

【Ｎコード】
Ｎ５１３７Ｖ

【作者名】
渡りガラス

【あらすじ】
異世界転生ものです。
日本で死んで、転生したさきは異世界！？
エルフが親！……かも。

主人公最強系です。
でもどの相手でも楽勝！ってわけじゃないです。

作者は完璧初心者です。そして私が文章書くのに慣れるための作品ですので、いろいろおかしいところもあると思いますが、よろしくお願いします。

1　……エルフ？（前書き）

他の作品を読んで書いてみたくなって書きました。
駄文ですが、よろしくお願いします。

1　……エルフ？

異世界転生ってあるだろ？　死んで異世界で生まれ変わるやつ。少し羨ましいなぁ～とか思う。だって小さい頃を有効利用出来るわけで、けっこういいよなぁと思ったりする。でも死ぬよなぁ一度、などとも思い。

まぁ現実にはあり得ない、うん。

とか思っていた時がありましたよ俺には……

そしてもう気づいているひともいるかもしれないが、異世界転生したっぽいよ、俺。

バス乗ってたら、なんか知らないけど猛スピードでトラック突っ込んできてサヨナラ。　痛さと体から血が流れていく喪失感、んであっちの世界の俺エンド。

目を覚ましたら赤ん坊でした。

最初の1年はボーッとした感じだったけど、それ以降ははっきりと考えられるようになった。
んで何故異世界だと思ったかと言うと、俺育ててくれてる人エルフっぽいもん！　耳尖ってて髪の毛と目ミドリィで男性、……ふぁんたじー。顔は整っていてイケメン。
でも父親エルフっ凄く驚いた。いかにも魔法使えますみたいな。やっぱり異世界って言ったら魔法でしょ！
こほん、そして母親だけど、いないっぽい。だってこの人以外見ないし。でも育ててくれる人がいるだけ感謝。
あっちの母親元気かなぁ、とかちょっと思ったら友人の事とか思い出し、軽いホームシック。もし帰れても分かんないよなぁ、そもそも死んでるし、容姿違うし。

で、父親っぽい人の事なんだけど、必要最低限の接触しかない。ご飯とその、下の清掃？

はっ！　まさか子供（赤ちゃん）嫌い？

それはともかく、周り確かめようにも所詮赤ちゃん、何も出来ない。見える範囲で分かることは木の家で、窓ガラスっぽいのはあるようだ。そこから木が見えたりする。部屋は大体六畳位の広さだ。椅子、机、暖炉などの必要最低の物しかない。ちなみに父親っぽい人は違う部屋で生活しているようだ。

まぁ幸い考えられる時間は腐る程に有ったのでいろいろ整理はついた。うん、ついたはずだ！

こほん、とにかく赤ちゃんではなにも出来ない。だから俺は素直に惰眠をmじゃない、睡魔に身をゆだねた。

意識が途切れる前に思った。

今更ながらこれっていわゆる……異世界転生だよね！

1　……エルフ？（後書き）

最後のは（仮）でも題名だったので、はい。言いたかったのでいわせて貰いました。

2　修行開始！と衝撃の事実（前書き）

なんともうお気に入り登録して下さった人がいるようです。
ありがとうございます。
駄文ですが、よろしくお願いします。

2　修行開始！と衝撃の事実

衝撃の事実が判明した！　いや俺が勝手に思い込んでた部分もあるけどね！

何が言いたいかというと、まさか世話してくれていたエルフの人が父親じゃないなんて！　流石に落ち込んだよ両親いないとか……

何故判明したかというと

喋れるようになってから恐る恐る「父さん」って三、四歳の頃呼んでみたら「私は、お前の父親じゃない」ってマジトーンでいわれました。

ハハハ、ナニをおっしゃるとか思ったけど本当っぽいです。

そしてなんでひろってくれたの？　って聞いたら、真面目な顔で暇だったから。と

……気まぐれにまじ感謝。

ちなみに俺の名前はカルトと名付けられた

んで、なんで人の声とかしねーのかなぁとか思っていたけどするはずねぇ！？

周り木、木、木が三つで森！　っといった具合に人がいない。そりゃ会えねーよ。

家の脇には小川があった。水が凄く綺麗で感動したのを覚えている。

まぁその後飛んでいる飛竜っぽいのをみて本当に異世界だなぁとか思った。

そしてなぜこの人ーーシャルノークさんというらしいがこんなところで生活しているかと言うと、エルフが嫌いだから（あんたもエルフじゃないのか？）、との事。後人とかと会うのも面倒、じゃなくて苦手らしい。

俺が六歳（拾われたので正確な日にちは分からないが）になったころ、シャルノークさんにこう言われた。

「カルト、お前には一人で生きていってもらわなくてはいけない。いつまでも世話は出来ないし、するつもりもない。よってこれからはいろいろ学んで貰う。」と

俺も拾って育ててくれただけで感謝だったので特に異論は無かった。何より家の周り……この森には魔獣がたくさんいるみたいだったので最低限身を守れないと二度目の人生即エンドしそうだった。

そんなこんなで修行？　はいろいろなことをやった。文字の勉強、家事全般、基礎体力の訓練から始まり、薬草の見分けかた、剣術、魔法などなど。

……基礎体力の訓練は真面目に死ぬかと思った。だって辛いけど少し体力ついてきたかなー、とか思うようになったころ、

「この辺でいいかな」

と連れて来られたのは家から結構離れた森のなか。

「よし、ここから自分で走って家までこい。一時間半以内な。遅れたら昼飯抜きな」

……はい？

いやここまで歩いて三時間以上かかってるんですけど。

その前に俺が昼飯になっちゃうよ

しかもどうやって魔獣から身を守るの？

まだ　基礎体力の訓練しかシテナイヨー

って聞いたら

走れの一言
いやいやちょっととか思ってたら転移魔法でもう姿は見えない。
うわーーー！

昼飯？勿論抜きだったぜ。
いやだって魔獣から逃げてたら家の方角分からなくなるしその他にもいろいろ
成功したら段々距離が長くなるし
俺の昼飯抜きの日々はしばらく続きましたとさ。

剣と魔法を実演して貰ったときはとにかく驚いた。

……訓練始まる前に、剣も魔法も出来るが期待するな、とか言ってたけど木刀振って一切見えないってどういう事！？　（全力じゃない）しかも魔法では、俺を襲ったかなりデカイイノシシモドキ（3メートル位で火をまとっていた）を、雷魔法で一撃。跡形もなく消え去っていた。
世界は広かった……
　まぁこんな魔獣がいっぱいいるところで過ごしてる時点である程度強いと思うんだけど。

まぁそんなシャルノークさんの訓練を受けつ、技術を吸収していった。最初はシャルノークさんの相手すらならなかったけど、段々剣が見えるようになり、すこしはまともな対戦にはなるようになった。

……流石まだ本気を出したシャルノークさんの剣は見えない。

ちなみに自分で魔法を作ってみた。

小型ポットみたいなのを魔法で形成してそこから魔力のビームみたいなのを発射するもの。

まぁ簡単にいうと、自律型支援兵器みたいなもんだ。

こっちの世界にはそういう発想がないのかかなりシャルノークさんは驚いていた（魔法を創るのがかなり難しいと知ったのはけっこうあとだ）

そんな感じで修行を続け、十五になり、周りの魔獣をあらかた倒せるようになり（あのイノシシモドキも楽勝で消し去れるようになった）、シャルノークさん剣でもなんとか引き分けに持ち込めるようになった、そんな頃。

いつものように朝の修行をしようと外に出ると、シャルノークさんが倒れていた

2　修行開始！と衝撃の事実（後書き）

感想など受け付けていますのでもしよろしければお願いします。

3　別れ

シャルノークさんが倒れた。
とにかく俺はベッドに運び込み、様子を見た。

別に昨日は何とも無かったはずだ。
いつも通り朝剣の打ち合いをして、魔法を練習して、ご飯に魔獣狩って来て……
ここ数年少し具合が悪そうだったり、体調を崩すこともあったけど……

上手くかくされてたかな

……いや違う。気づかないフリをしていたんだ

シャルノークさんは一時間少したって目を覚ました。
そうして俺をみて、もうここまできていたか、っと顔をしかめた。

悪い予感が高まっていく。

シャルノークさんは俺に話し掛けてきた

「カルト、お前にはこうなる前に出ていって貰うつもりだった」

「それってどういう……」

「まぁ聞け。私はエルフ特有の病にかかっている。ゆっくりと死に近づいていき、確実に死ぬ。例外はない。お前をひろった時にすでに、な。それでも魔法で誤魔化し、ここまで生きてきた。カルト、お前を拾ったからだ。あの男と組んで冒険者をしているときと同じくらい退屈しなかった」

「……」

「ただ死を待つだけだった私に楽しい日々をくれた。だから、お前には感謝している」

「私の事は気にするな
ずっと覚悟してきた。」

「そして、私からの最後の頼みだ。
この家から外の世界に旅だってほしい」

……それは前から考えていた事だ。タイミングを図っていたんだけど。気づかれてたかな。

そして、部屋の隅にある箱に目をやって

「そこの箱にはお前のために準備しておいたものがある。持っていけ」

と言った

シャルノークさんの容態は数週間で確実に悪化していった。
ただ見ているだけしかできなかった。

最期は少し疲れたから眠る
といって目を閉じた。

その目が再び開くことはなかった……永遠に。

3　別れ（後書き）

感想など受け付けていますのでよろしければお願いします。

4　旅立ち（前書き）

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます。

4　旅立ち

シャルノークさんが死んだ後、死体は徐々に消えていった。
なんでもエルフはみんなそうなるらしい。
自然に帰るとかいろいろ言われているらしい。

俺は数日間悲しみに暮れていたが、この森から出るための準備を始めた。
俺自身外の世界を見て周りたかったし、何よりシャルノークさんが背中を押してくれたこともあって、ここに留まるという選択肢はなくなっていた。

箱に入っていたのは、まず手紙だった。
内容は、この世界にはギルドというものがあり、いくのであれば入っている紹介状を渡せ、と。

また困ったときはクドクという男がここの王都にいるから手紙を渡して頼れ、と。

その他にもいろいろ書いてあったが、まぁ要するに頑張れってことだった

その他に入っていたのは金貨十枚、銀貨五十枚、銅貨百枚。……以外に多かった。まだこの世界のお金の価値わからないけど。

あと、袋。簡単にいうと、小さい袋の中に外の大きさ以上にたくさん入るやつだった。
お金はこの中に入れた。

そして最後に魔剣。鞘から出したそれは白銀に輝いていて、とても綺麗だった。そして何より膨大な魔力が込もっている。試しに木を一本斬ったらなんの手応えもなく斬れた
ヤバァイ。

とまぁこんな感じだ。

後は自分で保存食作ったりして着々と準備していった。

そして数日後
ついに準備がおわった俺は家の前に立っていた。

……いままで育った家。
もう戻ってくることもないだろう。

そして最後に一礼し、背を向けて歩き出した。

まだ見ぬ世界への期待と不安、そして少しの悲しみを抱えて……

4　旅立ち（後書き）

感想、お気に入り登録、評価などなど受け付けていますのでよろしければお願いします。

あと更新は毎日は出来なくなると思います。
学生の敵夏休みの課題、部活などもありますので……

5　出逢い（前書き）

戦闘描写難しいです……

5　出逢い

「……森から出られん！」
そう、出られない。
地図でみたら直径十キロ以上あるのだこの森。べ、別に迷ってないぜ！
こほん、まず道がない。あるとしたら獣（魔獣？）道位だ。
まぁ王都がある方向に歩いているからそのうち出られると思うが。

かれこれ数時間歩いている。暇だぁー！
たまに襲ってくる魔獣もいるが、俺の敵ではないので消し炭か食料になっている。

「あ～暇だ。せっかく森から出れると思ったのに……
道のりは長いしなんもないし。」

とそのとき、ふと耳に戦いの音が聞こえてきた。
生まれ変わったからか知らないがこの身体のスペックは異常にいい。
だから結構遠くの音まで聞こえる。

感覚を研ぎ澄まし、気配を探る
これもこの森で生きているために備わったものだ。意識しなくても半径五十～百メートル位は何がいるのか、敵意があるかないかがだいたい分かる。

……もう少し先のようだ。ここから三、四百メートルほどだろうか？
「これは……人の気配か？」

そして
ダークウルフの気配が十二。

さて、どうしようか
結構苦戦しているようだ。
森を出て（まだ出てはいないが）、最初にあった人間が骨になってましたでは笑えない。

よし、いっちょ殺りますか。

数百メートルの距離を数秒で駆ける
その場に着くと、背中の中程まで伸ばした紅（あか）い髪をなびかせ戦っている、美少女と呼んで全く差し支えのない少女がいた。年は俺より

少し上だろうか？
何故手に剣を持っているのか分からない位だ。
彼女の少しきつめの顔には焦りが浮かんでいた。
「何故ダークウルフの群れがこんなところに……」と呟いた。

うん、助けなきゃいけない理由が増えた。

そして俺は、自立型支援兵器ーーめんどくさいのでウェポンとよぶ事にしたーーを起動し魔獣の群れに斬り込んでいった。

そして、俺は彼女に「少し離れてて」と言い放った。驚いた顔をしていたが、まぁ問題無いだろう。
今更ながら接近に気付いたダークウルフ達がこっちに振り向くが、ーー遅い。近くにいた四体を片付ける
あっという間に群れの三分の二に減らされたことに驚きながらも向かってくる

飛び掛かってくる一体を斬り伏せ、死体となったそれを他のダークウルフに蹴りつけ、振り向きざまに一体を斬る。
ウェポンもなかなか活躍していて、いままた一体を貫いている。
そして、まわりに魔獣がいなくなったので、少し遠くにいるダークウルフに魔法を行使する

「雷槍よ、敵を貫け！」

魔法をくらったダークウルフが絶命する
だが、まだ終わらない

「爆ぜよ」
そうすると雷槍から周りに雷が荒れ狂い、群れの最後の数体を巻き込む！

そして、ダークウルフの群れは全滅した。
ここまで二分も経っていない。

これをやってのけた本人は「相変わらずこの魔剣の切れ味は凄いなぁ」とか呟いているのだった。

私は焦っていた。いつもの様にクエストをうけ、魔獣の森に来ていた。しかし、予想外の事がおきた。
魔獣の森は入口こそ弱い魔獣しかでないが、奥に行けば行く程強い魔獣がでてくる。
今回はあまり奥まで進んでいるつもりはなかった。
なのに
ダークウルフに囲まれていた。ダークウルフは個体でこそBランク程度だが、群れでいるとA＋にも届く。

ダークウルフはもっと先に進まなければ出ないはずだ。
私もBランクの冒険者だが、囲まれれば生き残る自信はない。
不意に「離れてて」という声がした。
反射的にダークウルフの注意が外れた瞬間に離脱する。

改めて声の発した少年を見た。
その少年は百七十五センチ位の身長に、この大陸には珍しい黒髪黒目をし、白銀に輝く魔剣を手に持っていた。年は私より少し下だろうか？

しかし、そんな少年にダークウルフが倒せるとは思わない。やはり加勢しようと思った瞬間、信じられない事がおきた。

あっという間に四体が倒れていた。

ダークウルフ達が態勢を立て直し少年に襲いかかる！
しかし、またあっさりと倒される。
少年の周りに飛んで攻撃している丸いものはなんだろうか？
しかし、次の瞬間にはそんな疑問も吹きとんでいた。

少年が

「雷槍よ、敵を貫け！」

と、唱えると雷槍がダークウルフを貫き、絶命する。

そして、「爆ぜよ」というと、雷槍から雷が放出され荒れ狂う！

そして、最後のダークウルフ達を巻き込む。

雷槍は見たことあるが、今のは見たこと無い。

いつの間にかダークウルフの群れは全滅していた。

呆然としている私に少年が声をかけてきた……

5　出逢い（後書き）

感想、お気に入り登録、評価などなど受け付けていますのでよろしければお願いします。

6　旅の同行者！（前書き）

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます。

6　旅の同行者！

しばらく魔剣の凄さに感動し、それをくれたシャルノークさんに感謝などしていた

あ、あの女性は……

いた。

呆然としていて声をかけづらかったが、かけないわけにもいかないので

「あの～、大丈夫でしたか？怪我とかないですか？」

と聞いてみた。

初めてのシャルノークさん以外との会話に少し緊張する

「あ、ああ、助かった。ところで君は？

」

「俺はカルトと言います。貴女は？」

「ああ、すまない。名乗っていなかったな。私はノエルという。冒険者をしている。
ところで君は森の奥から来たようだが……」

「ノエルさんですか、よろしくお願いします。
森の奥から来たのは住んでたからですよ」

と気軽に答えると

「こちらこそ
……待て。森の奥だとっ！？」

ずいっとノエルさんが顔を近づけてくる。
整った綺麗な顔が近づいてきて焦った。

「ち、近いですよ」

「ああすまない
しかし、森の奥とはどういうことだ？」

とノエルさんが真剣に聞いてくるので、簡単に
拾われて育ててもらってたんですよ～
みたいなことを説明すると

そうすると、いやしかしなどと呟いて自分の世界に入ってしまった

あらためてノエルさんを見るととても綺麗だった。
髪の赤とは対象的な瞳の青
顔は整っていて十人中十人が振り向くであろう容姿
身体は鎧ごしにもわかる
出るとこ出てて締まるところは締まっている。

しばらくしてあの～と声をかけると

「あ、ああ
しかしカルト君の話が本当ならあの強さも頷ける。
ちなみにこれからどうするつもりだ？」

「とりあえず、ザザドの王都に行ってギルドとか登録するつもりです。あと世間の事とか一応学びましたが、心もとないのでしばら

く王都で生活してみます。」

とりあえず王都に行ってみろって手紙に書いてあったし
カルトでいいですよなどと言いつつ答えた。

「じゃあ私もノエルでいい。
王都に行くなら私といかないか？
さっきの戦闘で剣が、な
それに命を助けてくれた恩もあるし、多少はギルドに顔がきく」
確かに剣が壊れている

「いいんですか？」
これはありがたい
「というか、こちらからお願いしたい」

などと言ってくれたのでよろしくお願いしますと言った。

こうしてノエルと王都に向かうことになった。

私はカルトを誘ったことに自分で驚いていた。
私は自分で言うのも何だが、それなりに容姿は整っていると思う。
それで言い寄ってくる欲望丸出しの奴が多くいたので、男はあまり信用していない。
はずなのだが自分で誘ってしまった
カルトはそんな奴等とは違う――と感じた
剣を壊してしまったが、彼が同行してくれるなら大丈夫そうだ。

最後によろしくお願いしますっといったときの邪気のない笑顔に私は少し――こほん、とにかく命を救われたのだから借りはかえさなくては

最後に笑いかけたときにノエルの顔が少し赤くなったのは気のせいだろうか？

悪い人では無さそうだし、何よりシャルノークさん以外との初めての会話でテンションが上がっていた。

まぁとにかくそんな感じで俺とノエルは王都目指して歩きはじめるのだった。

実はダークウルフがこんなとこにいたのは俺が殺気で追い払っていたからなのだが……

終わりよければ全てよし！

ということにしておこう

6　旅の同行者！（後書き）

感想、お気に入り登録、評価などなど受け付けていますのでよろしければお願いします。

しかし、あっさり仲間になりすぎた感が……

難しいです

7　近くの村についたけど……（前書き）

9／4加筆しました。

7　近くの村についたけど……

俺達はいま、森の近くの小さな村に向かっている。
途中魔獣の襲撃もあったが、撃退した。

「う～んあれか？」

「もう見えたのか？」
ノエルは一生懸命目を凝らしているがまだ見えないらしい。

「うん、まぁね」

そのまま数十分歩き続けると村に着いた。

「ここがムタリ村かぁ」

うぉ！獣人とかいる！でも、なんだろう。皆表情が重い。

「ノエル、皆表情が重いような気がするんだけど……」

ノエルが無言で頷く。
「誰かに聞いてみようか」

通りすがりの少年に声をかける。

「ねぇちょっといい？」

「あ、はい。旅人の方ですか？」

「うんまあね。それで聞きたいんだけど、なんで皆暗そうな顔をしてるの？」

「ああ、はい実はですね……」

彼の話ではここの近くにゴブリンの巣が出来たらしい。最初ひとつだとおもい、小さい内に村人達が潰したらしいのだが、実はもうひとつあり、それが巨大化して手に負えなくなったらしい。

「今のところは撃退できているのですが……」

不安そうにする少年。流石に村丸ごと避難っていうのは難しそうだな。

「ギルドに依頼や、近くの街に応援要請は？」

たしかに。

「ギルドはお金が足りなくて無理ですし、貴族も腰をあげません」

無言でノエルを見る。ノエルが頷く。

「分かった。ありがとう。じゃあ」

「あ、あの！　冒険者の方ですよね？」

意を決した様に話し掛けてきた。

「うんまぁ一応」

「ゴブリン退治に協力頂けないでしょうか？報酬は一生かけて払いますので」

「なぜ俺達に？」

元々そのつもりだったけど、俺達は見た目若いし、そこまで強そうには見えないだろう。

「ゴブリンの噂が広まって、冒険者の方はこの村に立ち寄りませんし、このままではいずれ……」

少年がうつむく。

「どうしてそこまで村を？」

「実は両親がゴブリンに殺されまして。個人的な復讐もあります。でもそれ以上に、父が戦って守ったこの村をやられたくないんです」

……父親、か。実の父親は知らないけど、シャルノークさんが父親がわりだったからな。シャルノークさんがもし誰かに殺されてたら俺はどうしただろうか？　もし力がなかったら？

「すいません勝手にベラベラ喋ってしまって」
申し訳なさそうにする少年。

「いや、聞けて良かったよ。その依頼受けよう。報酬はそうだな……一晩宿と美味い飯で」

少年が驚いた顔をする。

「いや、でも……」

「いいって俺が勝手にやるだけだから」

「……わかりました。村長に知らせてきます」

「いやいいよ。まだ成功するって決まった訳じゃないし。じゃ、行ってくるから待っててね。美味い飯よろしく」

少年は納得しないながらも引き下がってくれた。

「全く、お人好しだなカルトは」

「そうかな？　でも俺に出来るのはこれくらいだし、こんな雰囲気やだし。ノエルは待っててくれ」

「いや、私も行こう」

「気持はありがたいけど、ノエル武器無いじゃん」

「ぐっ、大丈夫だ。ここで買う」

ええ～。

まぁいいか。

幸い村にあった武器屋で剣を購入した。
一応俺の金だ。

「よし！　いきますか」

さっきの少年に教えて貰ったゴブリンの巣がある方へと向かった。

ところ変わってゴブリンの巣。

「ねぇ、あれって多いって範囲に入るの？」
見えるだけでゴブリンが百体程。後ろに洞窟があるので、もっと多そうだ。

「いや、流石にこれは、あまり無いな。かなり大きい。でも、やるんだろ？」

「うん、やっぱりノエルは……」

「くどい、だいたい命を救って貰ったんだ。この位のこと」

駄目っぽい。

「んじゃ、作戦って程ではないけど、まず俺が魔法で混乱させて、一緒に突っ込む。洞窟から増援が多い場合は洞窟を崩す」

負けるつもりは……もちろんない。

「ああ、構わない」

「そんじゃ行きますか！」

7　近くの村についたけど……（後書き）

無理やり感が……

感想などありましたらお願いします。

8　戦い（前書き）

新キャラ登場です。

8　戦い

魔法で先制したいところだったが、気づかれてしまった。何故だ……？

俺達を見てゴブリンが向かってくる。

「ノエル！　俺の討ちもらしを頼む」

「分かった」

ウェポンを起動し、先頭と戦いに入る。
こちらの方がリーチが長いので一体を斬る。返し手で一体を斬る。
舞う様に進んでいく。白銀の筋が通る度に一体減っていく。

「やっぱり数が多いな……」

ノエルを見ると、ゴブリンを軽々とほふっていく。ひとつひとつの威力はそこまで強くないが、確実に急所いをついている。

「カルトッ、洞窟から！」

やはり洞窟のなかにも多くいるらしい。

しょうがない。

「炎よ！」

一旦ゴブリンから離れ、バスケットボールより一回り大きいのを発動する。

「いけ！」

轟音が響き、洞窟の入口を崩す。

「よし、これでこれ以上増えないはず……」

しかし、ゴブリンもあとに退けなくなったらしく、死ぬ気で襲ってくる。

だが、元々の力が違いすぎる。早く、そして確実に数を減らしていく。

増援も含め、十分足らずで全滅した。

ノエルと合流する。大きな怪我はないようだが、ところどころ小さな怪我がある。

「終わったな――と言いたいところだけど、どなたですか？」
といって森のなかをみる。

「いや～流石に気づかれちゃったか」
そう、ここまで接近されたのに気づかなかったのだ。
男は銀色の髪をして、楽しそうににこにこ笑っている。

「いや～強いね。特に君」
っと言って俺をみる。俺は無意識に剣に手を掛ける。

「警戒されたものだね。まだ名乗っていなかったね。僕はジャンという。君達の名前は？」
カルト、ノエルと短く答える。

「カルト君にノエルさんか。よろしくね～。ところでこの少年見たこと無い？」
男がそういうと姿が変化して、村にいて、ゴブリンの話をしてくれた少年に変わる。

「そ、それは！」

ノエルがビックリしていう。

「あっ、気づいてくれた？」

なんだろうこの人。
どうも調子が狂うな。

「んでジャンさんはこんなことまでして、なんのようですか？」

「この近くで力の強い気配がしてね。来てみたら君達だったから、少し実力を見せて貰ったんだ」

わざわざそこまでするのか。

「そしたら、思いの外強かったから、少し僕と戦ってくれ」

と言い終わらないうちに闘気が溢れだし、鋭い斬撃が襲ってくる。反射的に魔剣を抜き放つ。その瞬間、剣と剣がぶつかる。相手も赤い色をした魔剣だ。ノエルが唖然としているが、余り余裕が無い。

「おお、今のを受けるか……」

相変わらずにこにこしながらいう。

「一、体、なん、なん、ですか」

絶え間無く斬撃が襲ってくる。
そのまま数十回剣を合わせる。受けては攻撃を繰り返していく。
普通の人が見れば、ただ赤と白銀の線しか見えないだろう。
カルトの右腕に薄く線が入り、血が弾けたと思うとジャンの顔に同じく薄い線が入り、血が弾ける。

つばぜり合いになり、お互いに離れる。
その瞬間、ジャンから闘気が消える。今までのが嘘の様に。

「いや～ここまでとは。久しぶりだよ」
いきなりの元気な声に拍子抜けしてしまう。
ノエルが気を取り戻し、
「き、貴様何のつもりだ！」
と殺気を放ちながらいう。
しかし、そんなものないかのように、にこにこ笑っている。

「君が気に入ったよ。しばらく一緒にいることにする」

はい？

すかさずノエルが

「なにを言っている！さっきまでカルトを殺そうとしてた癖に」

と言い放つ。

「そんな！　心外な」

と大袈裟に身振り手振りで悲しみを表現している。

これには流石ノエルも愕然としている。

俺を見てアピールしてくるので、

少々呆れながらも

「まぁ、お互いまだ本気じゃなかったですし」と言ってみる

「ほら、カルト君もこう言ってるだろう？」

……もういいや

8　戦い（後書き）

ジャンは主人公と同等か少し強いかもしれません。
特徴あるキャラのつもりですが、どうでしょうか？
感想などありましたらお願いします。

9　大丈夫だよ（前書き）

無理やりついてきたジャン

9　大丈夫だよ

あれからノエルはジャンのペースにのせられっぱなしだし、俺は俺で……。

いろいろ聞いて分かった事は、村にいた少年はジャンが幻術で作ったものらしい。俺達が話しかけなかったら、俺達がもし行かなかったら？　って聞いたら、「その時はその時、魔法で一応そう仕向たけどね」とのこと。俺は魔法よりは剣の方が得意だけど、それでもあっさりと幻術にかかるなんて。

んであの大量のゴブリンは元々いたのもいたが、ジャンが召喚したらしい。俺達が来た後わざわざ。しかも、全て制御下に置いたまま。ジャン曰くそっちの魔法の方が得意らしい。だけど、得意どころの話じゃないと思う。そういう系の魔法は詳しくないけど。

わざわざそこまで準備するのか……。

「……！　……ト！　カルト聞いてるのか！」

「あ、なに？」

近くでノエルに声を出されてびっくりした。

「だから、このまま連れて行くのか！？　だいたい、私達を騙してゴブリンと戦わせたんだぞ」

そうあの少年の話は嘘だった。いやあの少年はジャンが幻術を使ったものだから元々いない。確かに元々いたゴブリンによって多少の被害はあったようだが。

「連れて行くっていうか、ついて来るんだけど。まぁ良いんじゃない？　戦いになるよりは良いじゃん」

「そうそう、さっきのはつい悪い癖がでちゃったんだよ～」

ゴブリン程度じゃ君達の相手にもならなかったけどね。と相変わらずにこにこしながら言ってくる。少しは罪悪感とか無いんだろうか？あの後、村で一泊した。村を出てもついてくるので本気なんだろう、多分。俺としては戦ったものの、旅は人多い方が楽しいと思うしなぁ。

ノエルは相変わらず認めていないけど。

「ジャンは何してるの？」

興味本位で聞いてみる。

「旅をしてるんだよ～。世界をね」
おお！　俺も世界を見て回りたいと思ってるからな。
「なんでついてきたの？」
ノエルのためにに一応聞いてみる。
「そうだね～、一人旅に飽きたってことかな～」
ふ～ん。ま、いっか。幸い俺はノエルと一緒に旅出来てるしな。
ノエルがまだ敵視しているので、気休めにしかならないだろうけど
「大丈夫だよ。たとえジャンが敵になっても俺が守るし」
王都まで一緒に行くって約束したしね、といって笑いかけると
「そ、そうか」
顔を赤くしてしまった。どうしたんだろう？
「君達面白いね～」
とジャンがいって今度はにやにやしてた。なんなんだろう？

9　大丈夫だよ（後書き）

旅が三人になりました。主人公は森で生きてきたせいか、あんまり危機感ないです。

感想、評価などなど受け付けていますのでよろしければお願いします。

１０　ラムラスの街→ギルド（前書き）

受け付け嬢のフラグなどは通過地点なのでありません。

１０　ラムラスの街→ギルド

俺達は幾つかの村を越え、ラムラスという街に到着した。
街の門は石造りで頑丈そうで門は空いたままになっている。自由に往き来が可能で、それなりには賑わっている。奥にはこの地方の貴族の城らしきものが建っている。

「ここがラムラスの街かぁ」
今までの村と違い、規模が大きいし、活気もあるので、他の街もこんな感じなの？　とノエルに聞いてみると

「いや、この街は大きいほうだ。ここからいろいろな街へ行けるからな。もちろん王都にも」

街のなかに入ると露店や店等が並んでおり、冒険者らしい姿も見受けられる。

「そういえばさ、ギルドってわざわざ王都まで行って登録しないとダメなの？」

前から思ってたことを聞いてみる。

「この国で活動するなら良いのだけど。世界で使えるようにするには、その国の王都のようなところで登録しないとダメなんだ」

へぇなどと思っていると、今まで口を開かなかったジャンが言った。

「おお、流石この街はいろいろな珍しい物があるね～。僕は一人で回るからお二人さんはデーぐはっ」

ジャンが言った途端ノエルが溝尾に拳をお見舞いし、倒れる。ジャン、何したんだ……。そのまま俺の手を引っ張り離れていく。あれどうすんの？　まぁいいか、ジャンだし。

「ねぇ、ノエル。ちょっと早いって」

「ああ、すまない」

今手を無意識で繋いでいた事に気付いたのか、顔を赤くして、少し残念そうに手を放す。何でだろ？

ああそうか！　分かった。この人混みだとはぐれると大変だからな。そう思ってもう一度手を繋ぐと、それ以来顔を赤くして黙りこんでしまった。

う～ん。

「ねぇ、とりあえずギルドに登録しときたいんだけど、……ノエル？」

「ああ、なんだ？」

聞いてなかったらしい。

「いやだから、ここでとりあえずギルドに登録しときたいんだけど」

「そ、そうか。では私からギルドのランクと依頼に説明をしておこう。まずランクわけについてだが、ランクＦ～ＳＳまである。まぁランクＳＳは五人いれば多いほうだけれど。ランクＦは武芸などに不安があるもの達のためだから、ほとんどはクラスＥからだな。その辺は自己申告だからな。ギルドは依頼の仲介以外ほとんど関与しない。だが依頼を失敗し過ぎるとランクを下げられたりする。カルトには関係ないか。基本ランクＢまでは誰が受けてもいい。よほどの命知らずでないかぎり無茶はしないが。簡単なところはこんなことろだ。あとはギルドカードの説明とかあるからな」

うう、これ以上あるのか。

そうこう話している内にギルドに着いた。ギルドはそこそこ綺麗な外見で、中に入ると備え付けの酒場があった。

「奥に受け付けがあるから、登録してこい。私は宿を取ってくる」

「うん、じゃまた後で」

奥に進むと受け付けがあり、紹介状があったこともありランクＤになった。ギルドカードについてだけど、最初は無料で紛失などした場合銀貨五枚かかるそうだ。ランクアップについてはギルドマスターが決めるそうだ。

大まかなところはこんなとこ。

説明が終わってもノエルが来ないので、酒場の隅でミルクを飲んでいると、男の声が聞こえた。

「おいおい、なんでガキがギルドの酒場でミルクなんて飲んでんだ？」

１０　ラムラスの街→ギルド（後書き）

あれ？　ジャンは……

感想などありましたらお願いします。

11　VS冒険者！

「おいおい、なんでガキがギルドの酒場でミルクなんて飲んでんだ？」

みると顔を赤くした筋肉男四人がいる。酔っ払ってるのだろう、多分。

「ぼくは帰ってママのミルクでも飲んでな」

ギャハハと笑う。ええと、なに？

周りも止める様子はない。むしろ喧嘩なら大歓迎という雰囲気だ。

「おい！　聞いてんのかガキ！」

一人の男がカルトが反応しないことに苛立ったらしく、肩を掴んだ。カルトにとっては別に無視していたわけではない。どう対処すれば良いか迷ってたのである。森にいたせいか、こういうことには慣れてない。

「何ですか？」少し声を低くしていう。いきなり声をかけられて肩を掴まれたのだ。あんまり良いきはしない。

しかし、その態度が気に入らなかったのか、酒の勢いなのかは分からないが、いきなり殴りかかってきた。

男達は乱暴者達ではあったが、それなりの実力があって周りにも認められていた。その日は依頼を成功させ機嫌良く飲んでいた。そしたら、ガキが酒場の隅でミルクを飲んでいるではないか。少し痛め付けてやるか、と思って声をかけた。

いきなり殴りかかってきたのは驚いたけど、遅い。顔に向かってきた拳を顔を少しずらして避け、反射的に鳩尾に拳を入れて気絶させる。

あ、やっちゃった。

男達は一人が簡単に気絶させられたのには驚いたが、彼らにも面子というものがあり、退けなくなっていた。

「このガキ！」

一人はそのまま襲いかかって、あとの二人は剣を抜いている。

襲いかかってきた男を見て少年は突っ立ったままだった。さっきのは偶然だったのだ。ギルドの酒場にいた者達は全員そう思った。しかし、それは裏切られる。攻撃が当たる瞬間、少年の姿が消え後ろに『出現』する。少なくとも、ギルドにいた者達にはそうみえた。実際には見えてないだけなのだが。そのまま一人を手刀で気絶させ、剣を抜いた二人に迫り、魔剣を振る。白銀の筋が走ったかと思うともう魔剣は鞘に納められている。そのあとに、金属音が響く。見る

と男二人の剣が真ん中から綺麗に無くなっている。魔剣で切断されたのだ。少年は手早く二人を気絶させると、周りから拍手が巻き起こった。

「スゲーな坊主！」
周りからの突然の拍手にカルトは驚いた。カルトはノエルに、「絡まれたらとりあえずそいつ等を気絶させて逃げればいい」と言われていたので、そうしただけなのだが。
もしも普通の人がいたら否定しただろう。だが残念ながらいない。

元々実力主義の冒険者ギルドだし、気のいい者達も多い。
「おい、今の見えたか？」「いや、見えなかったぜ」など。

「坊主、名前は？」

「カルトですけど」から始まり、いろいろな質問を受け流しながら何とかギルドを出た。

「ふう」
やっとのことでギルドを抜け出す。
「いや～、お疲れ様～。流石だね～」

ジャンだった。乱闘が始まってからずっと見ていたのは気づいていた。にこにこしながら。

「助けてくれても良かったじゃないか」
不満げに言う。

「僕が出てっても悪化させただけだとおもうな〜。それに、無事だったんだから」

そうかも。などと思っていると、「そこは否定してくれないんだね」と少し落ち込んでいた。
む、否定して欲しかったのか？
でも……などと考えていると、そこに丁度ノエルがやって来た。

11　VS冒険者！（後書き）

感想、評価などなど受け付けていますのでよろしければお願いします。

12　うん、どうしよう

「なにやら騒がしいようだが……何かあったのか？」

あったよ。
そういえば気絶させて放置したままだったのだが、大丈夫だろうか？　俺が言うのもなんだけど。

「あったよ～。カルト君がアタックされてね～。こりゃぼやぼやしてると誰かに取られちゃうかもね」
にやにやしながら言う。
アタック？　確かに攻撃はされたけど。取られるって？

「ほ、ホントかカルト！？」
焦った様子で聞いてくる。心配してくれたんだな。少し嬉しくなりながら答える。

「うん、いきなり殴りかかってきたときは驚いたけど」
と正直にいうと
「殴りかかる？　どういう事だ？」

あれ？　分かってくれてたんじゃないの？
と思いながらさっきの事を説明すると、説明が終わった途端死体が一つ出来た。ジャン、いつも何故だ……。

「とりあえず、お昼ご飯食べようか」

「そうだね～。そうしようか」
うぉ！　復活速いな。　いつの間にか隣に来ているジャン。
どこか適当に探そうとすると、何処かから声が聴こえる。男の怒号と……微かに聞き取れる息を切らした様子の音。自然とその方向に向かう。ジャンも気づいているようだ。角を曲がるとドン、と何かにぶつかる。遠くに意識を向けていたから気づかなかった。この子が原因かな？　だってこっちに向かって来てるひといるし。めっさ恐い顔をしてる。……どうすればいいん。気絶してるし。とかパニックになっていると、ノエルが助け船を出してくれた。
「とりあえず、事情は分からないけど宿に連れていこう。ぶつかったのも悪いからな」
というわけで急遽予定を変更して宿に向かった。うん、どうしよう。

俺はいま宿にいる。人とぶつかるだけで気絶させるとかどうなの？　とか一人で思っていたら、よく見ると頬はこけ、顔色も悪くアザや怪我もある。服もボロボロだ。これは服と呼べるのだろうか？
そして、頭に耳がある。猫の。いわゆる獣人の女の子だ。髪は茶色ろく、可愛らしい顔をしている。年は少し下だろう。
ノエルとジャンはいない。ノエルはいろいろと必要なものがあるとのこと。ぶつかったんだから責任もて、らしい。いやいや。ジャンはにやにやしながらどこかに行った。

「とりあえず、回復魔法でもかけるか」
回復魔法は得意では無いとはいえ、きちんと習得している。
だいたいの傷やアザを治すと、少女がおきた。
「ん……。ここは？」部屋を見回し俺を見る。瞬間、少女が壁まで後退り怯えた目で俺を見る。ええと、俺何かした？
「ここは？　あれ……拘束用の腕輪がない？」

私は凄く混乱していた。そうだ、確か私は逃げていた、死にたかった。奴隷として生きるなら逃げて殺された方が良かった。そう思って逃げ出した。街のなかを走って誰かにぶつかって……
目の前に男性がいた。年は少し上だろうか？　黒目黒髪だ。部屋の隅まで後退り、思わずここは？　と呟いてから、奴隷の拘束用の腕輪がない事に気付いた。あれは確か奴隷から解放されないと取れないはずだ。訳が分からない。その男の子は困った表情を浮かべて話し掛けてきた。

１２　うん、どうしよう（後書き）

相変わらず、出逢わせかたが下手くそです。

よろしければ感想などなどお願いします。

１３　腕輪（前書き）

とりあえず王都が目標なのに……

13　腕輪

「ええと、その、大丈夫？」
こんなときってどういう事いえばいいの。
「え……あっ、はい」
戸惑いながらも答える。
「あ、そうだ。俺の名前はカルト。他にも仲間がいるんだけど。君は？」

「ミューイです」
なにこれめっちゃ怯えられてるんだけど。俺そんな恐い顔してるかなぁ。ショック。とか考えていると、お腹の音がなった。顔を赤くしている、ミューイ……さん？
「とりあえず、ご飯を持ってくるよ」
というわけでご飯を持ってくると、最初は恐る恐るといった感じだった。だけど最後には相当お腹が減っていたらしく、がっついていた。
とりあえず、ここに連れてきた理由とか現状とか説明した。

「はい。わかりました。助けていただいてありがとうございます。それで、その、拘束用の腕輪なんですけど……外れてるようですがどうしたんですか？」
ああ、その事か。
「外したよ。位置特定用魔法かかってたから」
本当に面倒くさかった。

「外した！？　一体どうやったんですか？」
そんなに驚く事なのかなぁ。
「まぁ、いろいろかかってた魔法を解除してみたりしたんだけど……」
いやあれシャレにならないでしょ。強制的に外したら、腕輪してる人殺す魔法かかってたし。……パズルみたいで、少し楽しかったのは秘密だ。
「ええと、信じられないですけど、現に外れてるわけですし」
と少し打ち解けた？　ところでノエルが帰ってきた。
「ただいま。おや？　起きたようだな」
扉を開けて入ってくる。
「ああ、うん。こっちはノエル。彼女はミューイさんというらしい」
「そうか、よろしく。ところで腕輪が外れてるようだが……まさか外したのか？」
皆さっきから……。
無言で頷く。そうすると、ノエルが呆れた様に見てきた。
「いいか、あれは奴隷拘束用の腕輪だ。普通は所有者しか解除できない。例えば、国のお抱え魔法使いが、五人がかりでも、一週間で解除出来るかどうか位だ」
……けっこう大変なのか。

「それで、だ。カルトはこれからどうする？」
「どうするって？」「すまないがミューイさん、貴女がいた商会の名前は？」
「ルナル商会です」
なにそれ。ていうか何のはなし？
ノエルの顔が厳しくなる。
「ルナル商会は、かなり大きい商会だ。奴隷に逃げられたと知られたら商会の名に傷がつく。必死で捕まえにくるだろう」

「じゃ、買うか」
皆はっ？　っていう顔になる。

「だって、腕輪外しちゃったし。これも何かの縁だ。適当に捕まえました。とかいって彼女を自由にしてあげよう！」

ノエルがいきなり笑いだした。

「ど、どうしたの？」
「いや、カルトらしいと思ってな。そうだ、そうするか」
と言って笑顔を見せてくれた。

「ただいま～」
ジャンが帰ってきた。
「ジャンか、何してたんだ？」
相変わらず、ノエルの反応は硬い。

「カルト君は気づいてたと思うけど、多分ルナル商会が監視っぽいものつけてたから、眠って貰ったんだ～」

さらりと凄いことをいうジャン。

「そ、そうか」

ノエルも驚いている。

「まぁ方針も決まったみたいだし～。善は急げだよ～」

まるで聞いてたみたいだな。

「じゃ、行くか」

ミューイさんの意見を聞いてないのは気にしないで欲しい。

１３　腕輪（後書き）

多分戦闘にはなりません。

感想、評価などなどあればお願いします。

１４　ミューイ（前書き）

久しぶりの投稿です。言い訳させてもらうと、リアルの生活が忙しくて……。

14　ミューイ

「あの、本当にいいんですか？　その、お金もかかりますし」

ミューイは、さっきノエルが買ってきた服を着ている。見た目は派手ではないが、ミューイの容姿も相まって、とても可愛い。

「いや、いいって。一度決めた事だし、別になにもしないよ。ジャン、奴隷って、買ったひとが解放出来るんだよね？」

確認大切。

「うんそうだよ～」

「あ、ありがとうございます。何から何まで」

何か照れ臭くなったので、話題を変える。

「そういえばさ、腕輪って外すのムズいん？」

皆驚いてたからなぁ……。

「そうだね～難しいよ～」

「いや難しいとかではなくないか？　確か簡単にかけられる割には解除が恐ろしく難しいときいたが」

む、そうなのか……。

「なんで？」

「う～ん、まあ簡単に言うと、カルト君は腕輪につけられてた魔法解除したでしょ？　あれの組み合わせって、十秒で解除の組み合わせ変わってくんだよ～。まぁ規則性はあるみたいだけどね～」

「ふ～ん」

「改めて聞くと、凄いですね！」

キラキラした目で見てくるミューイ。うっ……。
まぁ腕輪解除しても、商会に登録してあって書類とかあるからね～。解除なんて物好きなことする人いないけどね～。と言って俺を見てきた。
うっ。どうせ俺は無知ですよ！
……ちなみに、魔獣の森で育った事はジャンに言ってあったりする。

「あっ、そういえば腕輪の仕組みが出来たのは、結構最近だよ。作られたのは、約十年位前かな？　天才っていわれた魔法使いが作ったらしいよ～」

へぇ、ジャンって結構何でも知ってるな。ノエルとミューイも感心している。

そんな話をしている内に、ルナル商会に着いた。

「いらっしゃいませ。今回はどのようなご用件でしょうか？」

店員さんが対応してくる。

外も豪華だったが、なかも綺麗に整っている。でも奴隷なんて聞いたから、あまり良い印象は受けない。

ふと横を見ると、ミューイがとても不安そうにしていた。

「実はですね～、――」

とジャンが話すと、俺達四人は何か部屋に通された。ちなみに、交渉というか、話すのはジャンがやるらしい。……とても楽しそうだ。

俺はまだ、知らない人と話す事自体慣れないし、ノエルも戦いは得意だけどこういうのは不得意らしい。

担当っぽい男の人がきて、ジャンと話始める。

数十分後……。
そこには顔色が悪くなった担当の男性と、にこにこ楽しそうにしているジャンがいた。奴隷身分からの解放はその場で出来たけど、ジャンの謎がまた一つ増えたりした。

「というわけでミューイはこれから自由だ！」
あれから所変わってまた宿にきている。俺自身も嬉しかったので、叫んでみたりしたのだが……。

「良かったな」

「良かったね～」

皆で言うと、いきなりミューイが俺に飛び付いてきた。

「え～と……」

最初は驚いたけど、よく見ると泣いている。今まで抑えていた物が

溢れ出したように。とりあえず背中をさする。
しばらく泣いた後、消えそうな声で話し始めた。
「私、逃げてたとき本当に恐かった……。死にたいとさえ思いました。奴隷として知らない人に売られる位ならって」

皆に沈黙が広がる。

「でも、あなたに会えました。ノエルさんにも会えました。そしてジャンさんにも」

「会ったばかりの私を助けてくれました。それで私、決めました。カルト様、あなたについていくことを」

……はい？

「いやちょっと待ってよ！　まずなんで？　そして何故俺？　皆で助けたじゃん」

なにいってんのこの子！？

「もちろん皆さんには感謝していますが、実際お金払ってくださったのはカルト様ですし……」

「いやだから、返さなくったっていいって言ったじゃん！」

「それじゃ私の気が収まりません。無理やりでもついて行きます」

真剣な眼で見てくる。

えっと、まじで？

「とりあえず、様付け止めてくれない？」

なんか恥ずかしい。

「何ですか？　カルト様」

駄目らしい……。諦め早い俺。

その後、何回も俺の名前を呼んで嬉しそうに笑っていた。

まぁ、この子の笑顔がれるなら良いか……。

「よろしくお願いしますね？　カルト様」

１４　ミューイ（後書き）

仲間になり方が上手く書けないなぁ……。

感想、指摘などありましたら受け付けています。

15　そうだよな……

「う～ん。どれにしようかな……」

俺達は今、ギルドで依頼を選んでいる。

……周囲からの視線が強いのは気のせいである。それにしても、

「依頼の数多すぎね！？」

そう多い。だって下の方とか結構時間がたったのか、紙黄ばんでるもん。

「しょうがないんじゃないか？　冒険者なんて毎日死んでるわけだから、慢性的に人不足なんだ。依頼も毎日の様に入ってくるしな」

普通の顔して言い放つノエル。まぁ俺も森で何度も死にかけたけどね。

「ノエルってランクBだったよね。ジャンは？」

というかそもそもギルド入ってるかすら知らない。

「僕もBだよ～」

以外にもノエルが大きく反応した。

「な！？　本当か？　ジャンの実力なら、最低でもA位だと思ってたんだが」

え？　めちゃくちゃ強いじゃん。ジャン。

……けして狙った訳ではない。

「うん、まぁそういう話しもあったけどね～。僕は旅が出来るなら別に良いし。有名になりたく無いしね～」

ギルドマスターに頼んだんだ～。とかいってた。俺はどんくらい？　って聞いたら、実力でSは固いんじゃない？　とか言われた。いやいや。適当な事言っちゃダメだよ。

それにしても依頼は……。なになに、え～なんかもう倒したやつばっかりだな……。ランクBなのに。あれ？　こいつ倒したら、こんなに報酬もらえんの？

「決めたか？　カルト」

「う～ん。どれも結構前に倒したやつらだなぁ」

「……何も言わないぞ私は！」

どうしたんだろう？　まぁいい。

「これにするか」

そう言って一つの依頼を手に取る。

「ワイバーン１５体討伐か～」

「個体によってはＡにもなるが、カルトには関係ないか」

ノエルにどう思われてるの、俺？　……。

「えっと、場所はクライラー山。ってどこ？」

「ここから南東に行った所だな。この街からも見えるぞ」

「ああ、あの山か」

「でも結構距離あるよ～。ミューイちゃんどうするの～」

「そうだな」

連れてく訳にもいかないしな。どうするかな。

「と心配させたところで、実は僕転移魔法が使えます～。そして、クライラー山に行った事があります。この意味わかる～？」

転移魔法は行ったことがある場所しか転移できない。もちろん俺は行ったことがない。

「移動時間が短縮出来る、か」

なんにしても、ミューイに知らせとかないとな。

「え！　行っちゃうんですか！？」

「いや行っちゃうって……。大丈夫。今日中には帰ってくるよ」

「いやです。ついていきます」

と言って腕に抱きついてくる。

「ちょ！」

見ると、とても不安そうな顔をしている。そうだよな……。

「……分かったよ。一緒に行こう」

「本当ですか！？」

途端に笑顔になるミューイ。癒される。

「結局連れてくのか？」

「ああ、今のミューイを置いていけないよ」

「そうか」

「まぁ良いんじゃないかな～。それじゃ、行ってみよ～」

こうして俺は初依頼に挑むのだった。

「といきたいが、まずは準備からだな」

……忘れてた。

15　そうだよな……（後書き）

感想、指摘などありましたらお願いします。

１６　初依頼（前書き）

お待たせしました。時間かかった割にはそうでもないのですが。戦闘シーンが……。

16　初依頼

あれからしっかり準備した俺達は、ジャンの転移魔法によってクライラー山に来ている。

「どこいるの？　ワイバーン達は……」

「う～ん。このエリアか、次のエリア辺りかなぁ～」

「そうか……。ん？　あれかな？」

森の開けた場所に、ワイバーンっぽいのが見える。

「そうだな」

「じゃあ、ミューイは少し離れて見ててね。一応シールドはかけておくけど」

まぁ他の魔獣とかに襲われないとも限らないし。ウェポンもつけとくか。

「はい！　頑張ってください」

全部で七体か。ワイバーンは知性が低いが、凶暴で空に飛ばれると厄介だ。太くしっかりとしている牙。腕は翼に発達し、空中での高速移動を可能としている。

「じゃあどうする～」

いつもと変わらないジャン。まぁ負けるとは思わないけど、俺にとって初依頼だしな。こういう時は助かる。

「二体ずつだろう。残りは早かった誰かで」

ノエルもいつも通りのクールな顔。

「じゃ、行くか！」

風を切って近づくと、ワイバーン達が一斉に振り向く。流石に気付かれるか。一体に目標を定め、接近する。俺のスピードに驚いたのか、でたらめに尻尾を振ってが攻撃するのをかわすと、他の一体が空から降下して攻撃を仕掛けてくる。サイドステップで避けなが

ら降下してきた瞬間に合わせて剣を振るう。そのままワイバーンの勢いもあって、真っ二つになる。そして這うような姿勢で最初の一体に近づき、

「はっ！」

足を切り裂き、態勢を崩したところにとどめをさす。

周りを見渡すと、ノエルにワイバーンが襲いかかろうとしている。死角で気付いていないようだ。

「雷よ！」

ワイバーンの丸焼き一つ完成ってかんじで。いやー、危なかった。

「助かったよ、カルト」

「なんてことないさ」

「あと八体か～」

ジャンも倒したようだ。

八体か……。まとまってくれてると楽なんだけど。

「カルト様にノエルさんかっこよかったです！」

「ありがとう、ミューイ」

なんか照れます。

「私はまだまださ。カルトには及ばない」

「僕は～？」

「見てませんでした」

真顔でいうミューイ。

「ひど！」

まぁ両方冗談だと分かってるみたいだけど。というかジャン、もうこの扱いか……。

あれから数回のワイバーンとの戦闘で、目標数の十五体を討伐した。今は討伐証明のワイバーンの牙を持って、ギルドに依頼達成の報告に来ている。

いやでも、なんか達成感あるよな。依頼って言うのもあるのかな？　後みんなで戦ったってこととかも理由だろうか？

「依頼達成のご報告ですか？　ってこれ数時間前に受注されたばかりじゃないですか！　一体どうやったんですか？」

……そうだった。ジャンの転移魔法使ったしな。というか大きい声出さないでよ！　なんか皆さんご注目してるよ！

「まぁまぁ～。ちゃんと討伐してきたんだから、良いじゃないですか～」

「そうだ。ギルドは依頼さえ達成されればそれで良いのだろう？」

皆さんナイスです。

「は、はぁ……。それではこれが報酬になります。」

とりあえず報酬はもらったけど、あちこちから会話が聞こえてく

る。「おい確かあれってランクA一人と、ランクB三人のパーティーを一瞬にのした奴だろ？」　「ああ、それと隣にいる奴は確かあの紅い髪とあの容姿……ノエルじゃないのか？」

とか何とか。というかノエル、結構有名だったんだね。

「ねぇ、早く出ない？」

視線が集中して居心地がても悪い。やっぱノエルって美人だしな。そのせいもあるかも。

「そうしようか～」

ミューイもいやそうだし。

ギルド出た俺は気になった事を聞いてみる。

「ノエルって結構有名だったりするの？」

いや話に出るくらいだから有名なんだろうけど、どのくらいなのかな？　と。

「そこまでではないと思うのだが」

でも実際ノエルは強いと思うけど……。

「いや～、有名でしょ～」

無駄に色々な知識を持つジャン登場。

「そうなんですか？」

ミューイも興味があるみたいだ。

「うん、二つ名持ちとまではいかないけどね～。今のランクでソロの冒険者なんてあんまりいないからね～。ましては女性なんて、ここら辺では皆無だからね～」

「へぇ、凄いんですね」

「だな。凄いなノエルは」

「そ、そうか」

心なしか顔が少し赤い。どうしたんだろ？

「良かったね～。ノエルさん？」

「五月蝿い」

それだけ言うと、先にいってしまった。にやにやしているジャン。
相変わらずこういう時のノエルとジャンは解らないなぁ。

「むー」

横で頬を膨らませるミューイ。そのまま腕に抱きついてくる。

「どうしたの？　ミューイ」

「はぐれると大変ですから」

そうですか。でも別にジャンでも良くない？　とか思った。そのあとますますにやにやしているジャンがいた。

16　初依頼（後書き）

感想、評価、指摘などありましたらお願いします。

17　王都への道中で

「あ～、今日も野宿か～」

太陽はまだ沈んでいない。あの後ラムラスの街をあとにした俺達は、相変わらず王都を目指している。馬車なんかあれば、楽なんだろうけど……。まぁ管理とかにもお金かかるし、そんなんで装備の質落として、死んだりしたら意味がない。

「そうだな。今日中につければ良かったのだが」

「俺達はまだ良いんだろうけど、ミューイは、なぁ……。大丈夫か？」

鍛えているのと、いないのは結構違う。特に旅なんかは。

「大丈夫ですよ。皆さんと違って戦ってないですし」

「う～ん……まぁ、無理するなよ」

「はい！」

しばらく野宿の準備をしていると、数十人の気配が感じられた。

「どうしたんだ？」

「う～ん。これは商隊かな？　それにしても……。どう思う？　ジャン」

「最悪を想定してて悪いことはないと思うよ～」

そうか……。

数分後……。盗賊っぽい人達に囲まれました。

「げへへ、兄貴
この女達上玉ですぜ、
男の方もなかなか。
売ったらいくらになるか」

と、ひげもじゃのオッサン。
……とりあえず風呂入ろうか

「今日は運がいいな。通ったところにこんな奴等がいるなんて」
と他の盗賊。

「ねぇ、売るって？」

隣にいるノエルに話しかける。

「ああ、奴隷にして売るってこと」

「うわぁ、それはちょっと遠慮したいなぁ……」

「「「……遠慮出来るなら誰も奴隷になってない（よ〜）（ません）」」」

むぅ、断言されてしまった。

「おい！　なにごちゃごちゃ話していやがる！」

とつばを飛ばしながら言ってくる。

なので俺は

「いや～奴隷はちょっとやだなぁー、と思いまして」

「ぐへへ、わかってるじゃないか」

とひげも――もういいや盗賊Ａ

「うーん、このまま見逃してくれる……はずないよねー」

「大人しく捕まるんだな」

げへへ。と続ける盗賊Ａ。はぁ……。

「ノエルはミューイを守ってくれ。ジャン、行ける？」

「分かった」

「勿論さ～」

あんまり人殺したく無いんだけど。一つ確かなのは魔獣でも、人

相手でも殺らなきゃ殺られる。

「剣よ、　いけ！」

白く発光する魔法でうみ出した剣で、そのまま串刺しにする。

「なに！　このガキ、無詠唱で魔法つかえるのか！？　あり得ねえ」

囲んでいた一部から敵を排除する。

「僕を忘れてないかなぁ～」

いつも通りの少し気が抜けてしまうような声。しかし、確実に盗賊達を斬り伏せている。

俺も手を止めることはない。魔剣を一振りするごとに、死体の山が出来ていく。盗賊の間を二つの残像が通り過ぎていく。

「な、なんだこいつ

！　魔法使える上に近接戦闘もぐはぁ」

どんどん盗賊達の数は減っていく。

運良く当てたと思っても、それは残像でしかない。

逃げ出すことも出来ず、盗賊達は全滅した。

「相変わらず凄いな、カルトは」

と、ノエルが近づいてきて言う。

「やっぱり凄いです！　カルト様」

「う～んそうかな？　」

人を殺すことをあまり抵抗なくやってしまった。まぁこの『世界』では普通なのだろうけど。

「どうしたんですか？」

「いや、何でもないよ」

俺は苦笑しつつ、ミューイの頭を撫でた。ミューイの顔が赤くな

ってたことは、考え事をしていた俺にはわからなかった。

「盗賊討伐報告したらギルドからお金貰えるんだけど、どうするんだ？」

「貰えるものは貰っておこうよ～」

「そうだな。そうしよう」

今考えても仕方がない、か。

そんなことがあった数日後、俺たちは王都についた。

17　王都への道中で（後書き）

そろそろタイトルを、（仮）から変更しようかな？　と思う今日この頃です。

感想、評価、指摘などありましたらお願いします。

18　王都、到着！

「ここが王都かぁ～」

巨大な城門から真っ直ぐ王城道が伸びており、王城を取り囲む様に街が広がっている。

流石は王都というだけあって、多くの人々が行き交い、活気に溢れている。

「そうですね。私初めてきました！」

ミューイが目を輝かせながらいう。ノエルは勿論、ジャンも来たことがあるようだ。ノエルはここ基点にして活動してるらしい。

「あまり離れるなよ。探すのが大変だからな」

いつでもクールですね。

「王都というだけあって、色々あるからね～」

確かに。露店の数だけで、かなりの数だ。掘り出し物とかないかなー。

「まぁ色々驚いたりするのは良いと思うけど～。一応最初にやることやっといた方がいいんじゃない～」

忘れるところだったな。まずギルドで再度登録しないと。

「そうだった。ノエル、ギルドまで案内頼めるかな？」

「ああ、こっちだ」

とノエルが歩いていく。おっと、ぼーっとしてたら、本当にはぐれそうだな。

ギルドに着くまでも、露店や店が色々あった。

……途中に奴隷を売っている店もあった。人を殺してしまった事もだけど、こういうのに違和感とか感じるのは、前世のせいもあるのだろうか？　あそこは人を殺し、殺される事なんてほとんどなかったからな……。

そんなモヤモヤした気持を抱えたまま、ギルドについた。

「これで、登録完了になります。このまま依頼を受けるのでしたら、左手奥にあります場所で依頼を選び、こちらにお持ちください」

仕事の出来るお姉さん、っといった雰囲気の人に説明を受け、登録した。
やっぱり、王都のギルドというだけあって、大きかった。
……昼間から酒の匂いがするのは、どこも一緒のようだ。

「はい。ありがとうございました」

と言っても、すぐに依頼を受ける気はないので、そのままノエル達のところにいく。

「終わったようだな」

「お陰様で。待たせて悪かったね」

「それより、街を観てまわりませんか？」

ミューイが猫耳をピクピクさせながらいう。思わず触ってしまいたくなったけど、止めておいた。

「うん。それいいかも」

などとミューイと話していると、ジャンが結構真剣めに聞いてき

た。

「ところで、カルト君はこれからどうするの～。このまま王都で活動するの～？」

そういえば言ってなかったな。とりあえず、王都まで一緒って雰囲気だったし。皆と出逢えたって結構幸運だったよな。までまぁ今でも目的は変わって無いんだけど。

「とりあえず、ここで旅をするお金を集めるよ。いろんな国を観てまわりたいと思ってるから」

と言うと、ジャン以外が驚いた顔をする。なんだろう？

「そうなんだ～。まぁ僕は元々旅してたしね～。ついていこうかな～」

まぁジャンはよく分からないし、いいか。というか、元々一人旅の予定だったのに結構増えたよな、人数。

「私はカルト様について行きますよ！」

「いや、ミューイはここで受け取り手を探してもいいんじゃないかな？　旅って危ないし」

と、俺としては王都に着くまで考えた事を言ってみる。
そもそも、助けた事にそこまで恩とか考えなくてもいいのに、と思うのだが。だけど、ミューイは機嫌が悪くなった。

「嫌ですよ。無理にでもついていきます」

「いやでも――」

「まぁ良いんじゃないかな～。カルト君が守ってあげれば問題なしでしょ～？」

……ミューイは結構頑固だしなぁ。本当に無理にでもついてきそうだ。

「たまには良いことといいますね、ジャンさん」

「む、失礼な。たまには、って。ああ、ノエル君はどうするのかな？」

「……私は――」

とノエルが言いかけたところで、別方向から声がかかった。

「お主がカルトかのう？」

見ると、歳をとった、それでいて纏う雰囲気が周りとは違う老人がいた。少し長めで、色が白に変わり始めた髪、そして優しそうな笑みを浮かべているが、瞳が違う。その瞳は、言うなれば戦士の瞳だった。これまで幾つもの戦いを経てきた。並みの者では直視する事すら躊躇われる。

その老人にノエルが少し驚いた様に言った。

「ギルドマスター！」

へぇ、この人がギルドマスターか……。ふぅん、……ってギルドマスター！？

１８　王都、到着！（後書き）

いつもながら急展開っていうか、いきなりですかね……。

感想、評価、指摘などありましたらお願いします。

19　ギルドマスター（前書き）

お久しぶりです。
忙しくて更新できませんでしたm（　）m
いつもの駄文がさらに酷くなっていますが、よろしくお願いします。

19　ギルドマスター

「お主がカルトかのう？」

ぎるどますたーが、登場した！　いや、落ち着け俺。というか、なんで偉い人にいきなり会うんだよ！

とりあえず、あれだな、うん。挨拶大事。

「はい。俺はカルトと言います」

……これ以外言うことねぇ！　え？　何言えば良いんだ！　ノエル、そんな呆れた目でみないでくれ。

「ふむ、そうか……」

それだけ言うと、じろじろと全身を見てきた。なにかをはかるかのように。

「……なるほどのう。カルトよ。少し話す時間をくれんかのう？」

「へ？　はぁ……はい。」

というか、ギルドマスターの頼みを断れるはずないよね。
そういう訳で、ぎるどますたーと話す事になった。

あれから場所を移し、応接室みたいな所に来ている。ちなみに、ギルドマスターと二人きりだったりする。あまり嬉しい状況ではない。それと、ギルドマスターの名前はネクシスさんというらしい。

「それで、話しというのは？」

出来れば早く帰りたい……。帰って、観光するんだ！

「ほっほっほ、別にそこまで畏まらんでも。ちと私的に話したいだけじゃからの」

というかギルドマスター、プレッシャー凄いな。現役の頃は相当強かったのだろう。

シャルノークさんは静かな力の波動というか、そんな感じだったのだけれど、この人は重力が増加するような感じだ。

「それで……私的な話しというのは？　というか、いま仕事中なのでは？」

「ぐっ……。げふんげふん。なに、簡単な話じゃ。親友の息子というのを、この目で見に来たのじゃよ」

あ、話そらした。ギルドマスター、目が泳いでますよ。いわないけど。

……？　なんかいま重要な事聞いた気がするんだけど。……親友？！

「今親友って言いました！？」

「まぁこっちはそう思っているがの」

えー？　外見的にはネクシスさんはなかなか歳を感じさせるんだけど。あんまり接点感じ無い。

「なにを驚いている。エルフは長寿じゃから、別に驚くことはないじゃろうに」

……その長寿ってどのくらい？　そういえば、シャルノークさん二十代の見た目から変化してなかったよな。今更ながら。比較対象がいないと、いまいちよくわかんないな。それが普通だと感じてしまう。

「話を戻すが。数十年連絡が取れなくなっていた親友の紹介状を持った奴が現れたのじゃ。気になるのが普通だと思わんか？」

……。やっぱり人見なかったのは、連絡たってたからなんですね……。

「ところで、シャルノークの奴はどうしておる」

聞かれるとわかっていただろう。ああ、頭では納得してたはずなのに。なんでこんなに苦しくなるんだ。ただ聞かれただけなんだぞ？

「……シャルノークさんは……亡くなりました」

俺が絞り出すような声で答えると、「そうか」といって目を閉じた。

ネクシスさんも辛いのだろう。昔は何度も一緒に死線を乗り越えたはずだ。

俺にかけれる言葉などなかった。

「すまなかったの」

「いえ」

暫くして、少しは気持ちの整理がついたのだろう。ネクシスさんは話しかけてきた。

「ところで、お主は人間のようだがシャルノークとはどこであったのじゃ？　その前にどこで暮らしておった？」

「ええと、魔獣の森ですね。出会ったというよりは拾われた、ですね」

そんな感じの会話から俺が育てられたときのエピソードを話したり、逆に聞かせてもらったりした。俺も……話せて良かったと思っている。話していると時間はあっという間でかなりの時間が過ぎてしまった。

あ、ノエル達とどうやって連絡とろう？

ネクシスは考えていた。今までいた人間の少年のことだ。見た感じでは剣・魔法共に相当な腕だろう。あの歳でだ。大きすぎる力に精神がついていけてればいいのだが。

「……まぁ奴が育てたならば、大丈夫じゃろ。あと、今年は丁度あれが開催される年じゃったな。あの少年はいずれ有名になるじゃろう。あれが良い機会かもしれんの」

そう、今は無き友人が育てた少年の事を考えながら呟いた。

19　ギルドマスター（後書き）

感想などありましたらぜひ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5137v/

これって、いわゆる……（仮）

2011年11月24日00時45分発行